實相寺花園会報　第208号

令和8年8月1日発行　発行所　臨済宗妙心寺派　實相寺・實相寺花園会
〒761-0450 高松市三谷町1811番地1　TEL087-889-3838 編集発行人 山本 文匡　https://www.jissouji.net

お盆について

昨年より酷暑のため、棚経は午前中に限定し8月1日から回らせて頂いていますが、やはり随分楽になりました。これも偏に皆様方のご理解の賜物と御礼申し上げます。

さてこれまでもお盆や棚経について解説してきましたが、あらためて仏教的な起源と日本的な慣習、そして今日的意義について解説します。

お盆は『仏説盂蘭盆経』に由来します。内容は目連尊者が餓鬼道に転生した母親を救う方法をお釈迦様に尋ねたところ、安居が終わる7月15日に僧侶に供養すれば良いと教わります。また『救抜焔口餓鬼陀羅尼経』では餓鬼道に落ちることを予言された阿難尊者が、逃れる方法をお釈迦様に尋ねたところ、秘密の呪文を唱えながら飲食を餓鬼に施せば良いと教わります。

一般的にお盆には「施餓鬼」を行うのはこの二つのお経が根拠となっています。ですので施餓鬼や棚経では必ずこの呪文を含む『開甘露門』をお唱えするのが慣わしです。

ここで大事なのは、施餓鬼では先祖を供養するだけではなく、三界の萬霊に供養を施すことです。「袖すり合うも多生（他性）の縁」という諺があるように、全ての存在は過去生を通じて関係性がある、と見るのが仏教です。

一方、日本には仏教伝来以前から、時々先祖の霊が帰って来るという祖霊信仰がありました。お正月に迎える歳神様も祖霊ですし、今では願い事を書く七夕飾りも、元々は施餓鬼旗のような祖霊が宿る依り代だったようです。

お盆が本来の7月15日から8月15日になったのは、明治5年にグレゴリオ暦に改暦した為ですが、13日に迎え火を焚き、15日や16日の夜に川に提灯を流す「精霊流し」や京都の大文字、或いは各地で行われる花火などは、全て祖霊が冥界に帰るための送り火で、日本的な祖霊信仰に基づいています。

このように我が国のお盆は、元々あった祖霊信仰に仏教が加わって、先祖だけでなく三界の萬霊、つまり全ての存在の冥福を祈る利他行になりました。この目に見えない他者に対する思いやりこそが、未来に伝えていくべき日本人の心ではないでしょうか。

「小水（しょうすい）の魚（うお）に楽しみ有り」⑧
「補足」

前回、「自らの役割を果たすこと」こそが「小水の魚の楽しみ」に繋がると結論づけましたが、紙幅の都合もあり少し唐突だった為、補足しておきます。

『法華経譬喩品』の中に「今此の三界、皆是れ我が有なり。其の中の衆生、悉く是れ吾が子なり」という一節があります。

これは有名な「三界火宅」の喩え話の後に出てくる一節です。つまり三界（欲界・色界・無色界）の世界は燃えさかる家のようなものだが、中にいる子供達はそのことに気づかずに遊んでいる。親は何とか子供達を助けようと外から呼ぶけれども、子供達は遊ぶのに夢中で耳を貸さない。そこで父親は一計を案じて、羊の車、鹿の車、牛の車と段階的に次々と子供達が喜びそうなオモチャを用意して誘い出す、という方便の後に語られるのですが、お釈迦様から見れば、この世界の様々な苦しみはけして他人ごとではなく、そこで苦しむ衆生は皆吾が子のようだ、と述べている部分です。

何故そうなのか？それはお釈迦様は阿耨多羅三藐三菩提を得ているからなのですが、それをひと言でいえば「無我」だからです。仏には「自分」と「他人」という区別がありません。だからこそ、一切衆生が吾が子であるというような大慈悲心が生じるのです。

前回、人は自分より大いなる存在と繋がることによって人生に意義を見出してきたと述べましたが、他者と繋がるには自分を大きくするのではなく、小さくすることが重要です。そして、自分が無くなってしまえば、全てが自分になるのです。私達、禅宗徒が目指すべきは、まさにこの無我の境地ではないかと思います。

私達、人間はとかく自分の損得勘定にこだわりがちですが、それこそがまさに「火宅の人」です。それぞれが自らの役割、自己の本分を全うしていれば何でも無いことでも、時に人は道理を無視して自らの思いや感情を優先させがちです。その結果、様々な苦悩が生じているのではないでしょうか？

この世は因縁によって生滅していますので、自分以外を自分の思い通りに変えることは出来ません。自分で変えられるのは自らの受け取り方だけです。その為の具体的な方法が、今この私の役割に徹することだと、思うのです。小水の魚の楽しみとは、自己の楽しみを求めていては得られません。より大きな楽しみを求めた時に見つかる物ではないでしょうか。